

漢法苞徳塾資料	No. 537
区分	活動報告
タイトル	年間活動報告（平成 11 年度）
著者	八木素萌
作成日	2000.04.02

- A. 季節的な変化の総体が人身に及ぼしているものには、命の養いとして作用している側面と病因として作用している側面という二面性が基本的にある。一年を、四季、五季、六季などに分類する学説を考慮しつつ、季節の影響性の病因的側面が、治療に際して及ぼしている重要な面を、臨床的に観察し考察するということを、平成 9 年度以来実践した。これは本年もまだ継続していく心算^{つもり}であるが、とりあえずの概括が可能な程度に、経験が蓄積された。故に中間的総括を述べようと思う。
- B. この間には、注目すべき出版物（『タンパク質の音楽』深川洋一、ちくまプリマーブックス）が現れた。塾では、平成 9 年秋に、音楽の体への影響の臨床的観察を試みた。そして、漢法医学の音に関する見解が、まさに理論通りに機能していることが、確認できていた。この『タンパク質の音楽』では、現代物理学の視点からも、音楽と診察および音楽の治療的運用などについての研究課題と、音楽を臨床的に運用することが高い価値をもっていることが、確認されたと紹介された。「音楽の医療への適用」問題では、漢法医学の音楽理論を研究する必要性を改めて考えさせられた。
- C. 年度の幕開けに、所謂「突発性難聴」の治療があった。塾で関与した例は、最終的には 3 例であった。いずれも基本的には同一の方針で臨床に臨んで高い治療効果を挙げることができた。

春先の「風」症は、花粉症の場合にも多く見られることであるが、『素問』五藏生成第 10 に記述している「上実下虚」の傾向を土台にして「突発性難聴」の症候が現れている。3 例ともに、少陰の時期にひいたカゼが抜けきっていない所へ、風湿が上冒したための発症である。

一定の基本的方針で治療したが、その治療方針と言うのは、少陰期の時邪の遺残を除外することと平行して、局所に集約的に表現されている「風湿」の邪を除くことを主眼としたものである。この基本方針に従って施術した。少陰経と太陽経の「間接瀉法」・補津もしくは水分代謝の改善のための処置（個人差によって用いた穴は異なっている：三里の場合もあれば、列缺とか委陽なども、あるいはまた水分・中極・次髎〔次窞〕などの場合もあった）が併用された。偏歴と耳介部の細絡の刺血は、局所治療における中心的な処置であった。また漏谷穴も必要であった。これらの他に注意したのは、耳介部周囲のツボ〈流注している経脈は、手三焦経・足胆経―聴会を過ぎる・手小腸経―聴宮に終わる〉と水突〈近代医学耳鼻科では星状神経節刺は汎用されているが、水突穴から斜め内側下方に深刺しすると星状神経節を狙っている〉であった。

これらのツボは全て瀉法に用いたことは特に報告しておかなければならない。1例にのみ一部のツボを補法に用いたところ、症候の悪化を見た。これらの「突発性難聴」の症候は、「風湿」であるとともに局所の鬱熱を形成しているため、症候的には「湿熱」でもある。また、「突発性難聴」には、現代医学で言う「真珠腫」が多く見られる由であるから、漢法医学的には「肉の熱」と言い替えることも可能な症候である。かかる「熱」的病態に補法を行った為に「熱」証が助長されて悪化したものと思われる。そこで、急遽瀉法に転換しなければならなかった。

『素問』繆刺論第 63 には

「……邪客于手足少陰太陰足陽明之絡・此五絡皆会于耳中・上絡左角・五絡俱竭・令人身脈皆動・而形無知也・其狀若尸・或曰尸厥。刺其足大指内側爪甲上^{※1}・去端如韭葉・後刺足心^{※2}・後刺足中指爪甲上^{※3}各一痛・後刺手大指内側・去端如韭葉^{※4}・後刺手心主^{※5}、少陰銳骨之端^{※6}・各一痛立已。不已・以竹管吹其兩耳・鬢其左角之髮・方一寸・燔治・飲以美酒一杯・不能飲者・灌之・立已。……」

(註……※1=隱白、※2=湧泉、※3=厲兌、※4=少商、※5=中衝、※6=神門)

(註……※5=中衝→新校正云按甲乙經不刺手心主)

とあるのも調査した。

『靈樞』経脈第 10 に

「……手陽明之別・名曰偏歴……其別者・入耳合于宗脈・実則齟齬・虚則齒寒痺隔・取之所別也。……」

と言う記述に従って「偏歴」は中心的なツボであった。

病所を行く経脈・時邪と、病態の特徴を考察して、経脈の特質・時邪の特質・病態の特徴などが交差している意味があるとみられる所に強く影響するツボ・患者の症候の下地となっているものを治療的に配慮した配穴、この 3～4 点が治療配穴の枢要点である。

- D. 時邪に治療的に対応する取穴の問題として、時邪に対応する主治薬の「方意」の考察が大いに参考になった。時邪に対応する基本的な治則に法って治療薬が処方される訳であるが、その主治薬の「方意」を考慮した配穴が成立するのである。例えば、【秋分から立冬を過ぎて小雪に至る】期間では【潤燥育陰利水】法が基本的な治療原理とされる。この治則を鍼灸配穴的に行えば、水分補・気海補・腎腧平補平瀉・肺腧補と足太陰の合穴を取ることによって水分代謝を改善し、これを足三里の平補平瀉と組み合わせることで「保津」を狙うことができる。足太陽の榮穴と足少陰の榮穴を刺すことによって「寒水の経」の「過」によって起こっている「冷えのぼせ」を除いて「上鬱」を治し、手太陽の榮穴を刺すことによって、足少陰や太陽の処置が併せて作用するので「鬱熱」治療の効果が期待できる。これらの穴は、相乗的に相互補強的な働きが達成される。

〈例〉秋分から立冬を過ぎて小雪に至る期間は、【潤燥育陰利水】を基本的な治療原理とする時期であって、多く見られる症候的なものは「咳」と「癢」と「悶」であり、主治薬は〈猪苓湯〉とされている。『医方集解』には

「……此足太陽陽明薬也……茯苓甘淡滲脾肺之湿・猪苓甘淡・澤瀉鹹寒・瀉腎與膀胱之湿・滑石甘淡而寒……降火……解肌・通行上下表裏之湿・阿膠甘平潤滑・以療煩渴不眠・要使水道通利・則熱邪皆從小便下降・而三焦俱清矣・呉鶴臬曰・以諸薬過燥・故又加阿膠以存津液」

とある。細字双行には、

「徐之才曰・燥可去湿・桑白皮赤小豆之類是也。王好古曰・滑石為至燥之剂・蓋皆以行水之薬為燥・而不以燥熱之薬為燥也。故陶隱居欲於十剂之外加寒熱二剂。……本草備要・則以熱薬為燥剂・而以行水属通剂矣。五苓瀉湿勝・故用桂朮・猪苓瀉熱勝・故用滑石。」

とある。猪苓湯の薬味は、猪苓・茯苓・澤瀉・滑石・阿膠である。つまり、「燥」の治療目的のために、鬱熱による湿の停滞を除き、更に水湿を排除するように行水の薬味を配合している。このように利水・行水と熱と湿を去る〈滑石の乾燥させる作用を期待するような〉配穴。さらに処方構成している薬味の性質〈補津育陰の配経・配穴を行うべきことが示唆されている〉から、病を如何に捉えているのかが推察できる。この処方の「方意」を考察すれば治療の狙いは把握できる。その処方構成している各薬味の薬性から考えれば、治療に際して組み合わせられている複数の手法が浮かび上がってくる。これらを併せ知ること、換言すれば、「方意」を知って配経・配穴と刺法手技のヒントを得るのである。『医方集解』には〇〇湯は〇〇経の薬であると言うように記述しているが、用経の示唆として大いに有用であった。寒熱と虚実が明らかになれば刺法手技選択の示唆になる。

- E. 「時邪＝季邪」に応じた治療配穴は、平成 11 年では 3 年目の追及となっていた。四季分類の場合の「風・暑・燥・寒」と言う病因観、五季分類の場合の「温・熱・湿・燥・寒」と言う病因観、『薬註難経』〈張潔古〉の「4 難」註〈三陰三陽＝六経に対応する時邪の特徴を記述し、それぞれにおける人身の気の所在と其の場合の脈状を記述〉つまり六季分類の場合の病因観、そこに記述されている「気の所在」の認識を利用した配穴、これらの 3 種類の配穴は、いずれの場合でも『難経』74 難の原理に立脚した【外邪を瀉す「配穴法」】となっている。そこでは、要穴の五行的性質を、病因の五行的性質に対応させて運用する配穴となっている。

F. 「時邪＝季邪」に応じた治療配穴の問題では、一応の認識に達することができた。

イ……運氣論の達成に依拠して、1年を五季または六季に区分して、各季節ごとに様々な病が生じているのを観察しているのである。何れの病にも季節的な特徴と言って良いような反応型、病名が異なっても季節ごとに共通的な経絡的・経穴的な反応表現が見られた。この「病名が異なっても季節ごとに共通的な経絡的・経穴的な反応表現」があったと言う基底的なものは、各種疾病における症候を鋭く観察すると、病候の中に深層的に季節性が現れているように観測された。この点では、任応秋〈現存〉『運氣学説』（上海科学技术出版社）と『五運六気詳解運用』（権依経・李民聴〈現存〉・甘肅科学技术出版社）の記述が、大変参考になった。

これらは、発病構造論・発病機構論とも呼ぶべきジャンルと思われた。『黄帝内経』に記述されているこれらの理論分野とのすり合わせが必要であろう。

ロ……季節が変化するごとに、健康人にも病人にも、部分的に共通して経絡的・経穴的な反応が現れていた。病人は季節に共通した一般的反応に、その病に特徴的な経絡的・経穴的な反応が追加的に強調されていた。これらの事は、病気であろうとなかろうと、また病が重かろうと軽かろうと、季節ごとに共通した配穴部分が生じ得ることを示している。このような季邪反応を除く治療を行っただけで、病に伴う愁訴が消失した例は少なくなかった。印象深いことである。

ハ……四季・五季・六季に分けて、病因との関連性を把握する問題

↓

季邪と五臓の季節ごとの旺気との関連、

つまり「旺・壯・死・囚・休」のように表現されている循環局面と病因・病邪との関連問題

↓

季邪を除く為に運用する経と穴の問題、五行論的に把握して理解する場合の問題と、三陰三陽論的に季節転換した場合の様相を把握して、六淫を配分して考える場合の問題

↓

外感病と内傷病の治療原理論

これは【外感→熱→実→気】【内傷→寒→虚→血】とするシェーマで解釈するか？

或いは「気は陽から陰へ・血は陰を先にして陽は後に用いる」論に従うとするか？

の問題、

何れにせよ「五門十変」＝「剛柔配合論」は関連深いように見える。

これらは十分に論究される必要があるだろう。

ニ……『難経』では、「74 難」に記述されているところの【時邪の五行に应ずる五蔵の発病構造論】と【「積聚論」の発病構造論】の二つと、内経の2方向の発病構造論一

「……衛氣之所在・与邪氣相合・則病作……」〔『素問』瘧論第 35〕

〈衛氣のある所に邪氣と相い合えば則ち病作る〉

「……五蔵各以其時受病・非其時・各伝以与之……」〔『素問』欬論第 38〕

〈五蔵各其の時を以って受病す・其の時に非ざれば各伝えて以て之れを与う〉

これは季節の大過不及論における発病特性の論と関連深いように見える。

「……是故邪氣者・常随四時之氣血而入客也・至其變化・不可為度・然必従其經氣・辟除其邪・除其邪則乱氣不生。……」〔『素問』四時刺逆從論第 64〕

〈是の故に邪氣は常に四時の氣血に随いて入り客するなり、其の變化の至るや、度かるを為すべすらず。然して必ず其の經氣に従いて其の邪を辟除す、其の邪を除くときは乱氣生ぜず。〉

「……逆四時而生乱氣……」〔『素問』四時刺逆從論第 64〕

〈四時に逆らいて乱氣生ず〉

「……刺脈無傷筋・筋傷則内動肝・肝動則春病熱而筋弛……」〔『素問』刺要論第 50〕

〈脈を刺して筋を傷ることなかれ、筋傷れば内に肝動ず、肝動ずれば春に病熱して筋弛む〉

のように、誤治によって生じる病が五体論と蔵府論の関連において論じられている。

ホ……発症構造論・伝変構造論・病の「傾」や「移」についての論〔『素問』刺要論第 50〕などと、平行して考察すべき問題であろう。『傷寒論』では、太陽→陽明→少陽とか、太陽→少陽→陽明とか、手陽明→足陽明の如く、手少陽→手厥陰や、手太陽→足太陽などの病伝変のシェーマが示されており、伝経・循経伝などと言う傷寒論の用語に見られるように、経絡システムの具体的な相互関連と病の伝変に見られるものを実態論的（または経絡論的）に結び付けている。肺→肝→脾→腎→心→肺と言う相剋論的な病の伝変シェーマと、『傷寒論』型の病の伝変観とを検討しなければならない問題、また、肺→腎→肝→心→脾→肺と言う相生論的な病の伝変観と『傷寒論』型の病の伝変観の検討問題も残されたままである。

へ……「旺氣蔵は邪を拒む」とは？『難経』積聚論の論点と『素問』四時刺逆從論第 64 の論点などとの関連性の検討が必要であろう。季節の盛衰循環と蔵府の盛衰循環の呼応・病を「移す」・「傾く」・『素問』四時刺逆從論第 64 には季節に対応する取穴原理に背いた治療によって「乱氣」が生ずることを具体的に論じている。季節の過不及と病の過不及は『素問』玉機真蔵論第 19。

ト……六淫と運氣の六氣・六淫と六経は、また、運氣の六氣と六経や、病位と六経は、相互に対応しあっている。一年を六期に捉える理論は病を三陰三陽で把握して治療を組み立てる治療方法論と相互に見合っている。自然における季節の推移を、陰と陽の相互関係における消長として把握する訳であるが、人身の側において自然の変化への法則的な対応は、人身の側の三陰三陽において表現されている。具体的には経絡の体勢に表現されている。そこに、傷寒病であろうと温病であろうとまた雑病や情緒性疾患であろうと、要するに全ての疾病を治療する場合には、三陰三陽的に病を把えて治療するという論への、漢法医学の歴史的達成がある。

チ……『素問』六節蔵象論第9には

「……不知年之所加・氣之盛衰・虚実之所起・不可以為工矣。……」

と記述している。そして、

「……未至而至・此謂太過・則薄所不勝・而乘所勝也・命曰氣淫・不分邪僻内生・工不能禁。至而不至・此謂不及・則所勝妄行・而所生受病・所不勝薄之也・命曰氣迫。所謂求其至者・氣至之時也。謹候其時・氣可與期・失時反候・五治不分・邪僻内生・工不能禁也。……」

として更に

「……變至則病・所勝則微・所不勝則甚・因而重感于邪則死矣・故非其時則微・当其時則甚也。……」

と書いている。

- G. 季節の変動と病因とに関連させた治療配穴論には、靈龜八法・飛騰八法・納甲法・納子法・華佗法・奇経循環時間配分法などなどが歴史的には記述されている。これらは計算によって用穴を割り出す訳なので、繁雑であるという欠点は否めない。治則や配穴割り出し用の円盤型の器具を利用しても良いのであるが、実際の天候の寒温や燥湿その他の変動に対する配慮が、曆円盤の指示に拘束され過ぎて機械的に硬直する傾向を現しやすく、この点によって判断が乱される弱点も生じるのである。その為に、もっと簡便明解な方式を求める必要が生じる。こうして六因=寒・熱(暑)・火・風・湿・燥の六淫と「季節の氣」の問題、漢法医学における発病構造論などを改めて検討して、治療論との関連を見直す問題に直面するのである。

この問題についてもある程度の検討がつきはじめていっていると言えよう。

H. 現代 17 鍼法・杉山流 18 基本鍼法・現代中国基本鍼法（単式補瀉 10 法・複式補瀉 15 法）・古法 14 法・他の記録されたり伝承されている鍼法の実技研究に 1 月以来着手した。これは汎用太鍼の運用手技を十分に理解するための準備としての位置付けである。

平成 12 年 7 月 21 日現在完了

追加

一月に高熱（39 度）を出した風邪〈実は文字通りの傷寒病であった〉を、近代薬を一切用いずに治癒させた経験が 4 例あった。

発汗法の基本的配穴・解熱法の基本的配穴・下法の基本的配穴・和法の基本的配穴等が確立した。これは『汎用太鍼 その運用』に追加しなければならない。

また、心下部の硬結の診察図の草稿が仕上がった。新年度には間違いなく完成図となる。